

杜甫、七一―七七二、唐の時の人でこの詩は、(七七七)に長安が安〇山手におち杜甫が賊中で俘虜の生活をしていた時の作といわれ、芭蕉は早くから杜甫に傾倒し、「杜甫詩集」を座右から離さなかったという。

「奥の細道」の平泉の条に、国破れて山河あり、城春にして草青みどり、笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としてはべりぬ、夏草やつわものどもが夢の跡と記しているのは有名である。杜甫は聖詩、李白は仙詩と称され中国の古今を通じての大詩人である。杜甫の春望の詩、「浅学で白文は讀めぬため、日本語に訳された本を手にしたのは敗戦二・三年後である。」

敗戦のあと

「昭和二十四年中華人民共和国の成立、昭和二十五年朝鮮動乱起る」国内的にも昭和二十四年三鷹電暴走事件、下山事件、昭和二十五年警察予備隊の発足、昭和二十六年日米安全保障条約に調印、昭和二十七年皇居前広場にメーデー流血事件ありの騒乱の時期であります。津軽地方も農地改革により地主の没落があり。

私の宅地前の路地の南側に斉藤製米所の板蔵がある、これは敗戦後、農地改革で農地を失い年貢米が入らなくなった、旧金木の地主より米二俵で買って建てられた蔵であります。

満蒙開拓地の敗戦の間際にご主人は軍に召集され残る老母の死、妻と子は戦地の広野を死生の境を彷徨うって漸くに津軽の

人が自ら命を絶つ、説得されてようやく、師団は矛を収めたと言う。

日本軍もソ連軍も多数の戦死者がでる。この激戦にて中里の田中戦死される。その後、ソ連軍に強く抵抗した罪によりシベリヤの最奥地に師団が連行され、満三ヵ年伐採に抑留される。

最初一年間は空腹と寒さと疲労に依り朝起きて見ると死んでいることが屢々である、山の現場へ往復も死に行く状態である。作業中にも又仆れる。平川さんと二人一緒に「両方に柄のある大きなのこぎり」両方に分れて押したり引いたりして木を切っている相棒の岩手県出身の田代が午後は自分「田代」が平川氏の方に回って、のこぎりをすると言われて交代した直後に、他の人の切っている大木が倒れてきて下敷となって即死する。

遠いシベリヤで次々に斃れ行く姿は明日は我が身と思う時、唯、腹一ぱい白いご飯を食べて、死にたいと思ったこのことである。今朝も仲間の一人が死んでいる、誰れも知らぬ睡眠中の夜中のことである、シベリヤの朝は零下四十度近くになると寒気で痛くなるといわれる、静寂の朝の寒さは鳥や獣の鳴き声もなく作業に向う自分等の足音だけがザクザクと鳴るだけであるという。

シベリヤにも暖い春がきましたが、しかし、栄養失調で身体は弱って行く者が多く出る。やがて草の芽が出、ヘビも匍う、ネズミも走る、キノコが育ってきた、これらの物を堪えた飢え腹に焼えて食べ煮ては食べ一氣に満ばいに詰め込む。

ふる里に着くも先に復員されたご主人、住む家とてなく親戚の苦屋のかたわらで遠い満洲の我が家族を憂心のあまりに酒「家庭用のどぶろく(密造酒)」に浸り体を害してしまわせた人もいる。

敗戦を知らずに孤立無援の戦い

私と小学校同級生である平川信長は昭和二十年二月旧金木町白川清太郎、中里町田中、大石、武田村阿部敏光(現茨城県鹿島市在中)、小泊村加藤(現札幌市在中)等と盛岡入隊すると速時にハルピンに渡り初年兵の第一期、第二期の六ヵ月間チチハルで猛特訓を受け検閲を終了して、三三九部隊所属となり直後にソ連軍の猛爆撃受け山中に潜みながらの戦いが続きます。日本の敗戦となるも、敗戦とは知らずその後二十日間、ソ連軍との死闘を繰りかえしていたという。

ソ連航空機の屢々の日本敗戦のチラスのばら撒きはあった。けれども、皇国日本の必勝を信じていた兵は誰れ一人として敗戦を信じようとはしなかったそうです。

山岳地帯をさまよひ孤立無援となった師団に関東軍司令部からの終戦の報は届かなかったのです。すでに満洲各地では日本軍の武装解除が行われており、ソ連軍は師団規模の部隊の出現に驚き直ちに関東軍司令部に対して師団を停戦させるよう要請し、関東軍参謀を派遣されて二日間の搜索の末にようやく師団に接触され参謀等が敗戦を伝えるも信じるに至らず、参謀の一

さァー大変である。下痢が續発することになる、栄養失調の身には忽ちの内に重病になり死に至ったのである。

シベリヤに来て一年足らずで千五百人(平川さん等の収容所)の内、半数近い七百人の死去、あとに残った者も病弱となっている。この状態になってはソ連人が「ダワエ、ダワエ(働け、働け)」と叫ぶとも伐採のノルマが達成される筈がない。

その後、ソ連の上位人と元日本軍将校は平川さんの収容所より姿が消えたのである。

噂によると食糧の横流しと、ノルマ達成されなかったこと又日本の将校等は戦犯の容疑ではないかとも言われた。

そのことがあってから徐々にではあるが食糧の状況は良くなってきたが、シベリヤでの重労働の伐採作業が、くる日も、くる日も續く、作業の往来も又骨と皮の身に纏うボロの兵服と帽子が手足つけて歩いているようであったといわれる。

風のある日は風に煽られ、ふわり、ふわりと大樹の薄暗い中で伐採する姿はこの世と思われぬ幻想的にソ連人にも惨しいと思っただか、人指し指を口にあて「秘密を示す」近い内に「ヤパソ(日本人)ダモイ、ダモイ(帰れる、帰れる)」頑張れよと告げてくれる。「伐採作業の指揮は民間人。収容所は軍人監視」初秋となり、風が痩せ細った肌に惨み込んでくる。これからのシベリヤの寒い冬を越せるだろうかと思われぬ夜もある。

それから数日にしてダモイの「帰れる」日が来たが、実感が浮び上ってきたのは日本の興安丸に乗りナホトカ港を出航され

洋海に出て暫く、時が立つてからであったという。

此れまで何度となくダモイに欺かれ、皇国日本の軍人としての誇りも砕かれ、山の中での敗戦、餓鬼道に落ちた亡者にも似た三年間の捕虜生活とのサヨナラである。

祖国日本に帰れるこれからの思いと過去のシベリヤの思いが交差となって涙が溢れ止まらないダモイ、ダモイと言って肩をたたく仲間の顔も溢れていた。

それにも捕虜として収容所に入った時は千五百人であったのが興安丸に乗り帰れたのは五百人弱といわれる。

異国の丘 「吉田正・作」

(1) 今日も暮れ行く 異国の丘に

友よつらから 切なから

我慢だまってる 嵐がすぎりや

かえる日もくる 春がくる

(2) 今日も更けゆく 異国の丘に

夢も寒かる 冷たろ

泣いて笑ろって 歌ってたえりや

望む日もくる 朝がくる

(3) 今日も昨日も 異国の丘に

重い雪空 陽がうすい

倒れちゃならない 祖国の土に

辿り着くまで その日まで

シベリヤの丘で唄ったエレジーが昭和二十三年頃の帰還兵が

唄われ、NHKのご自慢でも放送され私等も、わら仕事をしながら仲間同志が唄いました。

南の島より兄は還らず

私の兄はフィリピのレイテ島で戦死されました。

死亡認定理由書

本籍地 北郡嘉瀬村大字嘉瀬字端山崎一六一

所属部隊独立之砲兵第十一聯隊(泉五三一八)

階級氏名 陸軍伍長 山中長一郎

一、認定戦死月日及場所

昭和二十年三月三十日

比島レイテ島シラット

二、認定戦死前後の状況

1、「レイテ」作戦前の状況

第二十六師団は昭和十二年十一月二十六日北支蒙疆にて編成支那事変に従事次いで昭和十九年七月中旬同地出發山海關釜山經由(準備の為約一週間釜山滞在)比島に向ふ八月十九日未明バシー海峡にて敵の魚雷攻撃を受け「玉津丸」沈没独立歩兵第十三聯隊の主力(泉三二六)海没也り。

兵団は八月二十二日「マニラ」上陸(一部は船舶故障に依り北「サンフルナンド」に上陸)後十月下旬迎中部呂宗「タルラック」附近の警備に任ず。

2、「レイテ」島に於ける行動の大要

兵団は先遣支隊(独立十二(正欠)工兵二十六基幹)

主力の二ヶ梯団に分れ先遣支隊は十月二十六日主力は十一月九日夫々「マニラ」出發「レイテ」島に向かう。先遣支隊は何等敵の妨害なく十一月三日「オルモック」に上陸也り。

主力は途中空海よりする敵の妨害を受け一部は「マスバテ」「セブ」島に遭難す、之が為「オルモック」上陸の日時に若干の差異あり。当時天候極めて不良にして「オルモック」湾に到着せるも上陸効程進捗せず。

加わるに敵機及敵艦の妨害あり之が為人員に若干の損害を生ぜる外装備の相当数及び軍需品の大部分は海没し戦闘力著しく低下す、兵団は取敢へず「オルモック」南方地区に兵力を集結し關後進前を準備す。

3、「アルベラ」附近の戦闘及び「ブラウエン」作戦準備

兵団は十一月十二日軍命令に基き「ベイハイ」の敵を攻撃すべく齊藤支隊(独歩十三)主力独歩十一の小笠大隊を派遣す同隊は「アルベラ」南方地区に於て有力なる米軍と遭遇す此の間兵団は逐次兵力を集結し一部を以て「ブラウン」作戦を準備、即ち工兵隊は全力以て作戦路の啓開に任じ一月十五日には独歩十三のII(長重松少佐)「ブラウエン」攻撃の為出發す次いで軍の和号作戦の企図明かとなり十一月三十日司令部は「ルビ」

に移動し該方面の地上攻撃を指揮す齊藤支隊はよう執拗なる敵の攻撃に対しよく「アルベラ」附近を保持しありしも敵の四囲よりする浸透により包囲せられ加わるに十二月七日米軍「オルモック」湾「イピル」上陸するに及び「ブラウエン」作戦中止せられ該方面作戦部隊齊藤支隊とは全く遮断分離の状態となり。常に米軍の攻撃に対し猛烈果敢なる戦闘を續行しありしも支隊は遂に十二月二十日未明最後の攻撃を実施也るもの如く消息を断つに至れり。

4、「ブラウエン」飛行場の戦闘

本戦闘は「垣兵団」空挺部隊(高千穂)との協同作戦なりしも進路峻峻の為「ルビ」方面よりの作戦部隊の「ブラウエン」進出稍々遅延し予期の如き成果を収むる能はざりき即ち重松大隊は数次に亘り奇襲強襲を續行し第三次攻撃を以て「ブラウエン」飛行場占領也るも敵の反復攻撃熾烈にして之が確保至難となり遂に「ブラウエン」撤去の己むなきに至れり十二月十二日部隊は「タリサヤン」集結の為転進開始す是れより先十二月八日頃米軍は「ルビ」「ブラウンウエン」中間地区に空挺部隊を降下し為に転進部隊は「ブラウエン」西方約十軒附近に於て進路を阻止也られ密林中不期戦闘を惹起し混戦の後十二月二十二日頃以降重松大隊全く主力との連絡を断ち該方面の状況詳かならざるに至れり。

5、兵団主力「タリヤヤサン」集結の状況

兵団主力は十二月二十五日「タリヤヤサン」附近に集結を開始す兵団は相次ぐ戦闘に依り歩兵部隊との連絡を失ひ二十年一月一日現在の集結兵力一千餘名に減す。

当時の集結部隊の主たるもの左の如し

師団司令部、同通信隊、兵器勤務隊、野戦病院、病馬廠の主力、独立野砲兵第十一聯隊、輜重兵第二十六聯隊の一部、歩兵部隊の残餘者⑩野砲輜重、野病は「オルモック」「アルベラ」間の資材輸送並に患者収療等の為相当の損耗あるも明かならず。

同地に於て兵団は若干の編成整備を整へ北部「レイテ」への転進準備を也り二十年一月三日頃より数次に亘る敵の空陸よりする攻撃に依り「タリヤヤサン」東方地区に集結中の野戦病院(患含む)輜重兵第二十六聯隊は玉粹せり。

6、「シラット」集結迄の状況

二十年一月三日兵団は米軍の包囲を突破し「タリヤヤサン」出発一月一日「ダナオ」湖西地区に於て「垣兵団」に追躡する敵と遭遇之と交戦し師団通信隊の大部を失う。二十年一月三十日「バレンシヤ」飛行場に突入之を占領するも猛砲弾の為多大の損害を受け特に司令部関係の損傷大にして兵団長及幕僚悉皆重(一部戦死也り)一月二十三日同地発「リボンガオ」を経て軍の自活地域たる。「シラット」附近に前進し途中地形の險惡補

給の困難等の悪條件を克服しつつ二月十日「カンギボット」山を通過「シラット」に到着し同地に於て先遣支隊へ独立歩兵十二〇〇名先遣支隊は十一月三日「アルモック」上陸後「ラマオ」山に進出不断の挺身奇襲を以て「ハロ」方面よりする敵の前進を制しありしも十二月七日米軍「オルモック」湾逆上陸に伴い。

軍命令に依り反撃作戦を実施し二十年一月三日迄「オルモック」東南地区に於て所在部隊と共に勇戦奮闘したるも遂に敵の突破する所となり軍の自活地域に転進此の間立石大隊玉粹し兵カニ割度に減す。支隊は一月十五日「ナグアン」山附近に於て「パロンボン」に上陸也る米軍の攻撃を受け部隊全滅し二月十一日「シラット」追及時の残留者は僅かに五、六十名にして同地集結時の兵団全兵力は約四百三十名なり三月十五日兵団長山縣中将戦死に伴ひ軍命令に依り沖少将、兵団長となる。

7、「シラット」集結並に其の後の状況

「シラット」附近集結々同時に自活自戦の態勢に移り持久戦を準備したるも数次の砲爆撃の為遂次戦力消耗殊に二十年三月三十日米軍の猛攻に依り独立之砲第十一聯隊及兵器勤務隊最後の突撃を敢行し全員玉粹也るもの如し、雨後屢々米軍攻撃に依り兵の愈々消耗し最後の復廊たる「カルブゴス」へ移動當時兵力は約六、七十名なり「カルブゴス」に対する米軍の最後の攻撃は七月三日にして兵団残存者は軍旗奉焼最後の突撃を實

施也るものの如く全く消息を絶ち終戦に至る。

三、採りたる搜索手段

終戦後米軍の援助に依り「レイテ」島内兵団主戦場附近に再度搜索員を派遣せるも遂に生存者発見し得ず。

四、死亡認定の理由

戦況第二項の如く又搜索に関しても種々手段を盡したるも生存者を発見し得ず且比島方面の復員完了し抑留名簿等と照合せるも該当者なく従って比島方面の残存者の事実なきものと推断也らるを以て第二項の時期地点に於いて各々最後の突撃を執行し全員玉粹せるものと認めらる但し戦況推移極めて複雑にして各地点時期に於ける戦死者の確認困難なる実情にあるを以て所属隊不明のものは各上級部隊の玉砕日地点を以て戦死認定せり。

昭和二十二年七月十日

認定官第十四方面軍残務整理部長 久米川好春

五所川原市の龍泉寺に父と二人で兄の遺骨箱を受取り、私は津鉄の汽車に乗る胸に抱いた遺骨を下し窓際の席に置く汽車はガッタン——ガッタン——と発車する。

日本晴れである、青田の上は微風が西より流れ窓から入るそよ風は骨箱に注ぐ、私は骨箱を窓の方に向ける。

六年振りの無言の帰国の兄にふる里だよと、心で告げてあげ

ました。微兵として北支派遣軍に加わり約三年間の戦い南方面の戦局が絶望的となった昭和十九年フィリピンへ派遣され昭和二十年レイテ島にて玉砕となって戦死された兄だった。ふと前の席の父を見ると外の風景を眺めて心は静かなようである。その後日骨箱を動かすたびにカタ、コトと音がする、父と二人で蓋を開け中を見ると納まっている品は〇〇之霊と書いた小さな白木の位牌だった。

資料	旧嘉瀬村による戦死者数
戦争	大東亜戦の戦死者、百二名 (嘉瀬忠魂碑から依る)
戦没者	日清、日露の戦死者、十七名

第二次世界大戦に依る戦死者及被害者と罹災者

ライフの画報第二次世界大戦史

「連合国側」

アメリカ合衆国	二九五、九〇四名
イギリス連邦	四五二、五七〇名
ソヴェエト連邦	七、五〇〇、〇〇〇名
フランス	二〇〇、〇〇〇名
中国(一九三七年より)	二、二〇〇、〇〇〇名
計	一〇、六四八、四七四名
「枢軸同盟国側」	
ドイツ	二、八五〇、〇〇〇名
イタリア	三〇〇、〇〇〇名

日本……………一、五〇六、〇〇〇名
計……………四、六五六、〇〇〇名

(一九四五年八月七日)の広島、九日の長崎(原爆の被害)

死者	重軽傷者	被害の割合
広島 七八、〇〇〇名	五一、〇〇〇名	市民三名に一名の被害
長崎 二三、七〇〇名	四二、〇〇〇名	市民四名に一名の被害

空襲その他による建物の被や罹災者数

家屋・建物の被害……………二、三六一、九〇六戸
罹災者……………八、七五四、〇〇〇戸

「産業労働調査局の調べ」右のライフと数の差があります。

(1)軍人軍属の死者……………一、五五五、三〇八名

負傷・行方不明者……………三〇九、四〇二名

計……………一、八六四、七一〇名

(2)銃後の国民の死者……………二九九、四八五名

負傷・行方不明者……………三六六、八三〇名

計……………六六六、三一五名

(2)のうち空襲による死者……………二九七、七四六名

負傷・行方不明者……………三六七、二八七名

計……………六六五、〇三二名

産業労働日報、第五の六。六月号。(一九五一年)

敗戦後、年々公的も、私的も戦争中の実事が判明してくる。

中国と先輩

某氏は青年学校、青年団の催し、村の祭りにも共に参加した仲間である。

昭和十八年ある某師団に入隊され、後中国に派遣され、皇国日本軍としての教育を受ける。「神国日本の優秀なる大和魂を持って大東亜戦の勝抜き、又東洋平和のためならばなんで命が惜しかろうと軍歌も唄う」某氏も私も日本の民は国策のはやりの半纏「国民服・軍服」を着ながら御国の首頭に合せアジアの国々の舞台で踊り始めていたのである。

某氏は中国に渡り第二期「入営して六ヶ月」の猛特訓して検閲も終り何ヶ月か目の事であったという。

中隊長はこれ迄にないような、気合の入った朝の訓辞である、遠卒者の将校も下士官も何にやら緊張されている、目的地に着くと古参将校が訓辞と訓示とを初年兵にあたっている。

今日まで諸君の訓練は敵と戦って勝ちためである。勝ちためには敵を殺さねばならない。これまでは藁人形を突き刺してきた、今日は生きた人「捕虜」を殺したのである。よく指導者の号令に従え目的を全うしべし。

某氏は最初の番に行うことになり横一列に並び前方を見ると日の丸旗が振り下げた。班長殿は軍刀を抜き、「銃を構え前進」

大声で号令をする、次は駆け足、次は止まれ、「伏せ」前方五十メートル、敵散兵を撃つ銃を撃つ方止め、着剣、突撃用意「突撃」突込めの号令のあとは、ワァァワァァの激越だけで無我夢中で捕虜を刺し殺していたという。

初年兵の刺し殺すに失敗した捕虜は即刻かたわらで監視していた、将校等の腰の軍刀が閃き一刀のもとに首は刎られ、あるものは真向から顔ごと切られる。

死体の背後には深い穴が掘られ、あと始末のためだろう。この惨酷の体験にはしばらく身の振るいが止まらなかったといわれる。

昭和十九年に入り南方前戦に中国からの日本軍の主力部隊の派遣により中国前戦の日本軍の弱体化したのを狙い、米空軍も加わり、しだいに各日本陣地が攻撃されるに至り、何か大きな作戦がありうると噂が流れ始めるようになる。

北京郊外にいた彼の部隊も各地で戦いをしながら前進したといわれる。主に撃合い戦であります。頭や腹を射抜かれた戦友の惨死の整理に当る度に、明日は我が身と思うと、心も荒みただ鬼畜となって戦っていたそうです。

敗戦の報には、ただ空しさに涙が流れたという。捕虜となり行う事もない日々の思ひは、我が懐しき里に帰れるだろうか、又日本の二十五倍分ある膨大な中国と戦い、方方の村町を歩き至る所で、「前五世紀半ば―春秋時代」の儒教人廟あり、道教人の廟「道観ともいふ」あり、仏教人の寺あり、これらの思想

の基に中国人は育ち日本人も又江戸期まで中国の文化を学び明治維新、政治改革をし西洋知識を学び封建社会から近代社会へと発達して、この現象を文明開化と云う。近代社会と進む日本に(一八六六―一九二五)孫文、中国革命の父、日本の志士たちの援助を受け、日本で、中国革命同盟会を組織。(一八八〇―一九四二)陣独秀、中国共産党の創始者のひとり、日本に留学している。(一八八一―一九三六)魯迅、一九〇二年日本に留学し、仙台の医専に学んだ。「阿〇正伝書」を残した。

(一八九七―一九四八)周仏海、中国の政治家、京都大学に学んだ。(一八八三―一九四四)汪兆銘、南京の偽の国民政府の主席、新日派の領袖。日本の名古屋で病死する。

(一八八七―一九七五)蔣介石、国民党政府の主席、日本に留学し、陸軍士官学校を出た。日本の高田連隊に勤務する。

(一八九八―一九七六)周恩来、日本に留学した。

右の中国の偉人達は日本に学び中国の近代化を進めた人々であると云われる。

(六八八―七六二)鑑真、日本の仏教の開祖、天台宗を学び、唐の高僧であったが、日本渡海に五回も試みてことごとく失敗され、六回目に、阿倍仲麻呂と大使の藤原清河等は第一船と、鑑真らの乗船第二船はほぼ同じく沖繩に着くがその後日本をめさす四船のうち日本へ着けたのは二、三、四の船で仲麻呂の乗った船はベトナムに漂着、一命はとりとめ苦難の末に又唐の都に戻り栄進されたが七十三才で死去される。

某氏は中国の前線にいた時分のことですが、道ばたの店で絹ごしドウフを売っているのを見て、兵隊たちが「日本のドウフがあるじゃないか。」といって大よろこびしたことがありました。「そういえば、油アゲまである。」と奇声をあげるありさまなので、「ことはもともとシナのものなのだ。だいいち、トウフという言葉からしてシナ語だし、ミソでもお茶でも、みなシナのものだ」と言ってみて、先輩の友兵が説明しようとする、「きさま、日本をバカにするか」と言ってみてどなられる。

ふつうの人はまったく日本古来のものだと思って疑わないほど、われわれの身についてしまった輸入品がどれくらいあるかわかりません。「きもの」など、世界に誇る日本文化の代表のように思われていますが、これももとは大陸からきた衣服です。日本古来の服装は、かえて今洋服にちかいかい、頭からかぶるしかけのワンピースや、ズボンと細い袖の上着だったのです。それが、奈良時代にとり入れた大陸の風俗が、だんだんに転化して、今日の着物になりました。

呉の国からきた機織工(四六九年、雄略天皇の代)を「呉織」といいました。—その製品も「呉織」であり、「呉服」という語は、そういうところからきているのです。だから、当時はぱりぱりの舶来ニュー・ファッションだったのですが、だんだんに「呉の国からきた、外来の」という意味は消えうせて、呉服屋といえども、もともとの日本的な感じのする店になってしまいました。これまでの中国の事柄は戦没者遺族会の役員を、ながら

ふるさとくろいし紀行

平成十年七月十二日、朝起きたら快晴である。あたかも私達一行を歓迎するような青空に心が浮き立つ。時は参議院議員選挙の投票日で、私は一票を投じてから会員の待つバスへと乗り込んだ。年に一度町外への史跡めぐりである。

今年黒石方面ときまり、一にも二にも見たい所がある、そして私が青森から疎開して十三年間移り住んだ土地でもある。役場前より黒石落合ホテル「ちとせ屋」の迎いのバスで出発、どの顔も久しぶりに合う人ばかりで話が弾む。バスは浪岡インターより高速道路へと上り、万緑の風を車中より吸いながら黒石市街へと向う。国道百二号線は私のふる里である温湯へと続く山形街道である。山形街道と言われた道は四本あり、そのうち黒石―蛾虫坂―葛川の道が、最も山の奥まで延びたもので、その昔、木炭、献上わらび運搬の道として、黒石温泉郷の街道へと発展したのである。

温湯は帰りに見ることにして、バスは浅瀬石川添いに走る。かつては奇岩、怪岩を多く見ることの出来る絶景でもあったが、昭和五十年の豪雨による水害で川が一変してしまった。二庄内地区の沢より溢れた鉄砲水によって、浅瀬石川流域の橋のほと

く務めた某氏が遺族会員の私に慰霊祭のおりおりの戦地の体験談からの部分を抜き書きされました。戦死者の霊を生のある限り祈り続けるといわれた某氏も故人とられました。

津軽弁 村の笑い話

「アクタレ婆ア」

島次郎ドゴノ婆ア、口汚なく嫁いびりするので、村人から「アクタレ婆ア」と陰口をきかれていた。

嫁が少しでも気に入らぬと「コノツ、イヌ、コノツ」と、犬呼ばわりするので孫の長五郎は、三人嫁を貰ったがみんな逃げられている。

四番目に貰ったのがサヨだが、これも三日前、婆にいびられ、実家に帰っていたのを、長五郎が迎えに行き、やっと連れ戻して来た。

長五郎「婆や、イヌば、つれてきたじゃ」

婆ア「ナニツイヌば つれてきたア、

犬タデラデバナア、二匹もナニスタバ」

長五郎「サヨば、ヒデキタチャ、ナ、サヨごとば、イヌて、叱るベセ」

婆ア「ンダナ、ヨク、クツガレネデ、ヒデキタナア」

(森平)



櫛引 八千代

んどが流失したのである。

実家から電話があり私もすぐにかけて見たら、道路の舗装が飴のように捲れあがり、子供の頃よく遊んだ吊橋が影も形もなかった。実家は少し高い所にあつたので、水害にはまぬがれたが、親類の家は川辺りにあつたので二階まで水に浸つたと云う、水の引いた跡はと行って見ると冷蔵庫や、下駄箱の中には泥がびっしり詰つた状態で、水の恐ろしさがどんなものかを、私は始めて知らされた記憶がある。

バスは最初の目的地へ着く。東北一高いと云う溪谷に架けられた城ヶ倉大橋は車を降りて散策した。

新緑が美しく橋よりの眺めも最高である。紅葉の絵巻とは、又ひと味違った景色に大満足で、木々の色も萌黄色から群青色まで、それぞれ緑の濃淡がすばらしい。

橋の真ん中に立ち谷底を見ると、何か小さな生きものが飛んでいた。岩つばめだそうである。私達の外にも観光にきている人が多く、その岩つばめを珍しそうに眺めていた。

梅雨晴れや墨絵ぼかしの山河あり